25
二十五時間
二階堂×豪炎寺 企画合同誌
for Adult
R18

二十五時間
二階堂×豪炎寺 企画合同誌

試合に勝ったらなんでもしてくれるって約束しましたよ

ね？

確かに云ったし約束を破るつもりはないが……

だが

何でこうなる!!

似合わない女装@二階堂修吾

リボン忘れてますよ？

そうじゃなくてね？豪炎寺君。

先生はお前が女子用制服を持っていることが心配だよ

夕香のです

……。

今時こんなの通販とかハンズとかドンキとか色々

あるじゃないですか

それより何でジャージ着てるんです

脱がんぞ

冬場の女子高生じゃあるまいし脱いで下さい

監督…往生際が悪いですよ

待て！豪炎寺!!

W4L 潤。

キャ!!!

……。

ぎゅー

ぎゅぎゅぎゅ

何だかすごく倒錯的というか……

これ以上小粋な恋のスパイスはいりません!!

元生徒かつ同性なだけでおなかいっぱい!!

え。

木戸川と雷門のどっちがいいですか？

いや

両方遠慮しておくよ

……遠慮しないでどうしたいのか言って欲しいんですけど。

言ってくれなきゃどうして欲しいかわからないし

監督のこと知りたいし

……それに

俺は

監督がしたいなら何だって

……嫌じゃ(ない)し

豪炎寺

どうしてそういう可愛いこと云うかな

あ〜もー

監督のしたいこと

全部、俺に教えてください

今、豪炎寺からちゅーしてほしいかな

ところで何で木戸川の制服着て来たんだ？

その方が盛り上がるかと思って

あと汚してもいいように

ああ…。

愛のしるし

仁茂田あい

バサッ
監督…
……
おー…起きたか豪炎寺
今日の朝刊お前が載ってー…
うん！カワイイ
これ
どうしたんですか？
ぎゃー
ぎゃー
ぎゃー

こらこら痛いじゃないか

痣…

何かあったんですか？

そうか

覚えてないのか―…

はっ、

あう

ん…ん

そこっ、きもち…ぃです…

ここ？

はいっ、もっ…イっああ

あっ

ダメ――!!

ドガッ

ア――ッ!!

まっま!!

ゴオ

バキッ

ボーキィ

ボーン

爆熱ストーム!!

あ～

また…!

またイクッて…

かんとくっ

もっと…

やー!!

ゴオォォ

あ～

…それは知りませんでした

すみません

カアア

いや――いいんだ!うんっ!

それだけあ～アレだ…豪炎寺が感じてくれている、しょ…証拠、だし…な…っ!

ゴほ～

監督

オレ、良い事思いつきました

次回から蹴らないようコレでオレを縛るのはどうでしょう？

ゴト

ビニテープ 500m

リ…

……

……

ビニール紐は危ないから、もっと軟らかい素材にしよう

な

はい

おわり

二十五時間

二階堂×豪炎寺　企画合同誌

豪炎寺！
日本代表選抜
おめでとう！

あ…っ
ありがとう
ございます…

おすしパーティイヌ

武方たちには
「リベンジパーティ」
先にやったんだ

いっぱいあるぞ～

ばくばくばくばく

あいつら 転んでも
タダでは起きない！ みたいな～!?
って張り切ってたよ

すごい食ったけどな!!

おお…

なんせ 世界…
だからなあ

はい…

ぶる…

だから豪炎寺も
モリモリ食って
がんばれよっ！

……

す

ん？

どうした？
もしかして寿司
嫌いだったか？

？

ぎゅ…

お…おっ!?

どうした!
スシ食べよう!

なっ!

監督…

!?

お寿司
頂く前に

少し つきあって
くれませんか……

えっ

あー

チュ…
チュッ
チュッ
チュ
ナニトク…
ナニトク…

っ…く
もうこんなに
……？
ハァハァ

ふ…っ
はぁ
もしかして
試合前の高揚感…
…ってやつかな？
ナギ
くにくにっ

ひょい

世界を相手に
闘えるって思うと

楽しみすぎて
ゾクゾクする…
のだろ？

ぎゅうー♡

はは はい
でも…っ

うんうん
そうかそうか

キュ♡

かんとくも…っ
こういう
気分に

なりました…
…か？

はぁ
はっ

きちゅっ
きちゅ

ドク

それは…
興奮して震えたよ

は…あ…ッ

ビク

はぁ…
はぁ…

ビクッ

おれも

はぁ…

かつてあなたが
闘ったフィールドで

自分も闘える
のかと思うと

ふるえる
んです

武者震いが
止まらないんです

—だから

強く…して
…ください

まったく

お前には
かなわないな

そして

若い…ッ

ばくばくもぐもぐ

直後に
よく食えるな…

動いたら
腹が減って
しまって

監督は
もうちょっと
運動すべきです

ぐぬっ

ドヤ顔で…

ギリ…

でも…あの
監督

もそ

もそ

うん？

お祝い…
ありがとう
ございました

見ててください
おれの事…！

ああ

よーし
俺も食うぞ！

もうイカしか
残ってません

なにー!?

おしまい

二十五時間

二階堂×豪炎寺　企画合同誌

週末

「二豪の日常。」

wagi.

二階堂宅

なあ・・・
豪炎寺

・・・・・

中学卒業したら

だいたい一緒に居ます。

一緒に住むか。

お帰りなさい！

ご主人様！

・・・！

ご飯にしますか？
お風呂にしますか？

ご飯もお風呂も
出来てませんが

それとも
わ・た

俺だけじゃ
ダメですか・・・っ

ムッ

なんスネ

ラーニングブ
スパッ

ハィ・・・

ズリ

もじ

もじ

!!

お帰り！

ご飯にする？
お風呂にする？

それとも
オレに
喰われとく？

・・・

可愛い・・・
と、思い
ます。

?・・・ちょ

ラブ!?
俺ヒロインなの!?

ダメですか!?

ダメっつーか
ちょっと
引くな・・・

ガーン

程好く
バカップル
です。

俺は嫌だ。

owari.

ワルチン

二十五時間

二階堂×豪炎寺　企画合同誌

じっ

ああやって一人
今日の試合の
イメージ
トレーニングを
しているんだな

ざわ

さすが
豪炎寺だな…

ざわ

おい…見ろよ
豪炎寺の奴…

もう豪炎寺君の
頭の中では試合は
始まっているん
だね

キリッ
つまりは色仕掛けである
ごくっ
しかし監督も一筋縄ではいかない相手だ
綿密にシュミレーションをしてかからなければな…
おい豪炎寺大丈夫か？
居残り特訓はいいが疲労でダウンじゃ元も子もないぞ
まあお前ならそんな心配必要ないか
かん…とく…
…豪炎寺？
かんとく…お…おれへんなんです

からだが
すごくあつくて…

あたまが
ぼうっとなって…

はぁ

はぁ

ね…かんとく
こういうとき…
どうしたら
いいんですか…？

大丈夫だぞ
豪炎寺！

ポン

それはな
極度の疲労状態の
ときに起きるただの
生理現象だ

男の子なら
なにも恥ずかしい
ことなんかじゃ
ないんだぞ

よし！
トイレ行ってこい

失敗！！

ああっ
豪炎寺が
止められた！

今日の相手は
そんな強敵なのか！

鉄壁の
守りだな！

ダメだ…まずはあの
理性を崩さなくては…
なにか…なにか方法が
あるはず…

あー
スマンな豪炎寺
せっかくお前が泊まりに
来てくれたってのに

ふらあ

いいえ
こちらこそすみません
うちの父があんなに
強い酒を持たせるから…

や…やめなさ…

ちゅっ

ちゅっ

ふあっ

あっ

スマン！
豪炎寺っ！

ああっ
監督っ！

ぁ〜ん

これだ…！

豪炎寺が
決めたぞ！

さすが
豪炎寺だ！

この試合
行けるよ！

問題は
どうやって
監督の家に
泊まりにいく
口実を作るか
だが…

やったな

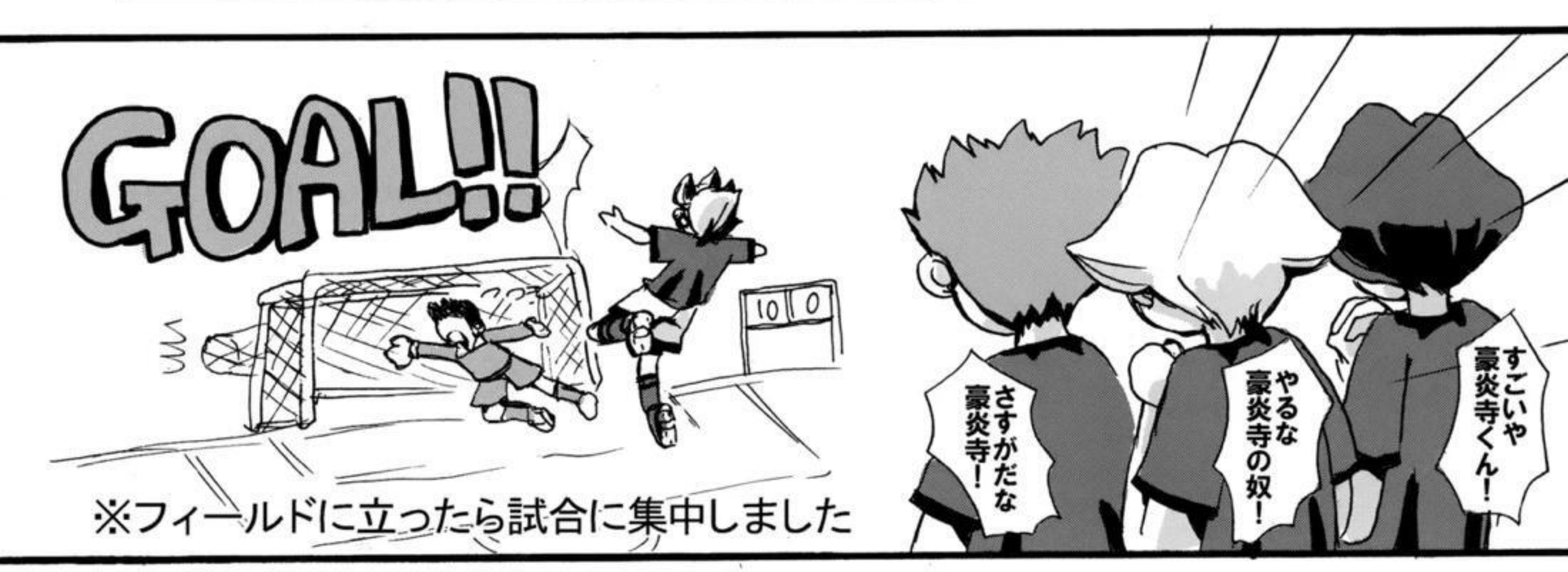
おっ

よっ
豪炎寺

どうだ調子は？
その顔じゃ
今日の試合も活躍
してくれそうだな

監督！

今度監督の家泊まりに行っていいですか？
くわっ
よし！じゃあ今日の試合勝ったらな！
さらっ


GOAL!!
10 0
※フィールドに立ったら試合に集中しました
すごいや豪炎寺くん！
やるな豪炎寺の奴！
さすがだな豪炎寺！

大成功
その後監督は豪炎寺がおいしくいただきました

おしまい

センチメートル
作.めし
インスタントがあるから食べないか！
豪炎寺！
何の…？
ふつうとカレーとシーフードがあるぞどれがいい!?
カップスープ
あぁ。
ファン♪ファーンファ♪ファファ♪
続いては昭和の名曲…
おっ 九ちゃんが流れてるぞなつかしいな
キューちゃん？
きゅうり
おいおい なんだもう坂本九も知らない世代か
さかもときゅう…
級？球？
見上ーげてーごらんー♪
あ 知ってます
夜のー星をー♪
いいビージーエムじゃないか！

小さーな星の♪
小さーな光が♪
ささやかな幸せを
うたいつづけー♪

なあ豪炎寺

ここはな

俺にとっては
思い出深い場所なんだよ

見上げて
ごらんー
夜の星を

あらためて
代表おめでとう

お前のこと…
誇りに想ってもいいかな

二階堂監督！

オレは監督の
ご指導があったからこそ

ささやかな
幸せを
祈りつづけー♪

ここまで来れたんだと
思ってます…!!

ファーファファファ
ファララー♪
ファララー♪
ファーファファファ♪

チャランチャン♪
手をつなごう　僕と
追いかけよう　夢を
チャランチャン♪

二人なら
苦しくなんかないさ
俺はお前には何も
してやれなかったと思ってるぞ
さて
もう食えるんじゃ
ないか？
見上げて
早すぎですよ！
まだ1曲終わってないのに!!
ごろん
…というか
なんか
ぬるくないか？
監督　これ
いつ沸かした
湯ですか？
…昨日…？
夜へ～星を～
……

見ててごらん
ほんとに？
あの
二階堂監督
夜の一星を
すごい。
ごちゃ
ん？
僕らのように
名も無い星が
オレ 頑張りますから
ささやかな 幸せを
祈ってる
ずっと
見てて下さい
ん！
ずるる
ああ！もぐ
キリ 勿論だ！
25 forever…中

二十五時間

二階堂×豪炎寺　企画合同誌

夕香ちゃんか？

いや…夕香じゃない…

ある日、監督から着信がたくさんあった

着信あり　9件

ブーブー

ブーブー

いくらかけなおしても電話に出ないので俺は心配になって監督の家に向かった

ごっ豪炎寺!?

大丈夫ですか？監督…

えっあぁ…あがってくれ

おじゃします

そうしたら―

監督が、二人になっていました。

おわ～～～お

尾刈斗中との練習試合―

いやーすみません飲み物忘れちゃって…

いーえお気になさらず

あっでもそういえばそれ・・・実験用でした

実験用ドリンク

え？

…で、こうなった、と？

実験って…

…そうなんだ

すま…ん

え？

まぁそんなことになったわけだ!!

ぎゅっ

ひっ

皆で解決策を練ろうじゃないか！

さわさわ

おっおい！おまえ!!

説明しよう!!分裂したもう一人の二階堂は日頃の二階堂の性欲そのものなのだ!!

あ～もう修也…今日も可愛いなァ…

っやめ…て、くださいー

ハァハァ…

ビクッ

うーん
まだかな〜

ぎゅ
ぎゅ

そんなこと…してないでっ
もっと真剣、に…
なってください…

あ、そうだ
ついでに
俺の性欲を
満たさない限り

—

このままずっと
二人に分かれた
ままだから

なんてこった

↑
知らなかった

23：30

かんとく！ほらっぬいで服!!

えっえっ

あ〜

のしっ

あと30分思う存分ヤってください

え…？うそっ

監督はずっと二人のままでいいんですか!? 困りますよ！

えっいやそっそれは困るけど豪炎寺はそれでいいのか…？

ゴリゴリ

いいも何もこれが一番早いんだよな…豪炎寺？

うッ…はぁ…はい…

・・・・・ッ

なんやこれ…

はっ…かん、とくは
それ、とも…俺じゃ嫌、ですか…

豪炎寺…

んんっ

ズッ

ク

ギュッ

はっ…

監督…

あっ

かん、とく…

…ッ

んッ、あっ
気持ちいい、です…

んっ

俺もって言いたい、
けど…

ぐるぐる

ぐるぐる

既に二階堂も
限界だった

多分きっと俺も
発散すれば
一人に戻れる…
はず
スマン豪炎寺…
!!!!

ちょっと前

欲望任せ オレ

いつもの オレ

エロイたとこロス

今

欲望任せ オレ

欲望任せ オレ

多分戻る!!

ああぁもう！どうにでもなれっ

豪炎寺…そろそろイッていい、ぞ…

ぐぐ

ぐぐ

あっ

ひっん

んんっ…んっ!!

ぐぐ

ぐぐ

ぐぐ

あっ

—こう、えんーじ…

…豪炎寺

ゆさゆさ

…かん、とく？

おはよう…ございます

…一人に戻りました？

つあ～戻ったよ！

…ごめんな

ゴロ～ン

いえ…大丈夫です

…いや…でも

いいんです………気持ちよかったですし

ねぶい

！

ごっ豪炎寺～

がし

うわっ

もう一回

しません

melody

See

たった一つの吐息さえ、浴室ではよく響いた。

二階堂は自宅のマンションでシャワーを浴びて身体を流し、蛇口を締める。

紺色の髪は水に濡れれば黒が際立つ。

湯気を立たせ、排水溝に流れていく髪の中に、色素の薄いものが混じる。白髪かと手に取れば、髪質が違った。

「あいつか」

水を含んだ毛は指で擦れば滑らかな感触がする。

これは、二階堂の前に浴室を使用した人物のものだ。名前は豪炎寺。二階堂が監督を勤める木戸川清修の元教え子で、今は雷門に転校してしまっている。今日の夕方に彼は二階堂の元へ訪れて、一晩泊まっていく。木戸川と雷門の距離は離れているが、それでも豪炎寺は会いに来てくれた。なぜかとなれば、そうなってしまったとしか答えようがない。

フットボールフロンティア準決勝での再会以来、悲運に引き離されながらも惹かれ合っていた二人は、わだかまりが解けて阻むものがなくなった二人は、そうなってしまったのだ。それからは誰にも知られずに、二人きりで密やかに愛を育んでいる。

「はあ」

また一息吐いて、豪炎寺の髪を流した。

豪炎寺は今頃、湯で温まった身体で二階堂が貸した寝室のベッドにぐっすり眠っているだろう。時間が時間だから仕方ないとはわかっていても、一日の短さが物足りなく感じた。過ぎった思いに二階堂は頭を振るう。なんだかこれでは、まるで――――。無理に思考を止めて浴室を出た。

脱衣所でTシャツにジャージのズボンとラフな部屋着に着替えていれば、扉越しから音が聞こえる。開けて居間を見れば、明かりの消された部屋にテレビだけがつけられ、ソファに豪炎寺が座っていた。タオルで髪を拭いながら二階堂は豪炎寺に歩み寄り、肩を揺らす。

「豪炎寺？」

「……ん」

傾いてしまっていた身体を直し、豪炎寺は眼を擦って二階堂を見上げる。湯上りの、タンクトップにハーフパンツという姿の彼の肩は冷えていた。

「どうした、湯冷めしてるじゃないか」

「眠れなくて」

答えた直後に生欠伸をする。二階堂は苦く微笑み、豪炎寺の隣に腰掛けた。

「まったく、お前は」

――こんな二人きりの時でさえ、見え透いた誤魔化しをするのか。二階堂は声の先を心で思う。

豪炎寺の肩を抱き寄せて、どうしたと同じ質問をした。二階堂の手は大きく、豪炎寺の成長途中の肩は軽くおさまってしまう。湯から上がったばかりの彼は温かく、じわじわ温度が浸透し、豪炎寺の心までも溶かしていく。

「……話、を」

薄く唇を開き、そこから細く掠れた声を発する。テレビの音が流れていても、空気の隙間を縫うように二階堂の耳へ届いた。

「話？なにか忘れたのか？」

「いいえ」

豪炎寺は頭を二階堂にもたれさせてから見上げてくる。薄暗い部屋の中で、漆黒の瞳にテレビの人工的な光が反射した。

「ただ、話がしたくて。なんでもいいんです。二階堂監督と」

「俺と……？」

豪炎寺を見下ろす二階堂の瞳が瞬く。

「そうです。このまま眠ったら、一日がもったいなくて」

「……そう、か」

相槌だけしか出来なかった。浴室で過ぎらせた思いを、豪炎寺が声に出して言ってきたのだから。

これは喜ぶべきなのか。二階堂にはわからなかった。どきりと胸は高鳴るのに、気持ちが追いつかない。まるで初めてのような感情に戸惑う。初恋でもなく、年甲斐もなく。

「じゃあ、なにを話そうか」

足を組む振りをして、視線をテレビに移す。テレビは古い映画が流れていた。

「……」

豪炎寺は横を向かれた二階堂を凝視してから、テレビを見る。二階堂は気付かれてないと思っているようだが、逸らされたのだと悟っていた。子供だから騙せていると慢心しているのだ。今のような無意識な子供騙しを二階堂は平気でやってくる。豪炎寺としては結構傷付くというのに、まったくわかってない。

「……」

話そうと思った口が言い出せない。本当は学校の話をしようと決めていたのに、二階堂監督には仕事を想像させて、つまらないか、などと一人気落ちした。

「豪炎寺？」

二階堂が見やれば、豪炎寺は難しそうな顔をして俯いていた。ほんの少し、唇が尖っている。

「おーい、どうしたんだ？」

わざとらしく目の前で手を振って見せれば、不機嫌そうに払ってきた。
「そういうの、やめてください」
「なら豪炎寺こそ、話してくれよ。なにかあるんだろう」
「俺の話、監督には退屈そうだから」
「まだなにも聞いてないだろ」
二階堂は身体を横に向け、豪炎寺の身体も向かい合わせる。両肩を掴んで、顔を上げてくれるように構えた。
「学校の話、しようかと思いましたが、監督にはつまらないですね」
「なんでそうなるんだ」
「監督にとって、生徒の話を聞くのは仕事じゃないですか」
「お前はもう、俺の生徒じゃない」
豪炎寺がはじかれたように顔を上げたかと思うと、さらに深く俯く。
「そう、でしたね」
「だから、仕事じゃないんだ」
そっと顎に手を添えて、顔を向かせる。
「聞かせて欲しいな、豪炎寺の話。お前が話してくれないと、今のお前がどうしているかなんて全然わからないんだ」
「だったら、俺も監督の話が聞きたい。生徒には話せない事も、知りたい」
「んー？豪炎寺には刺激が強すぎるかもなぁ」
二階堂が喉で笑い、豪炎寺の顎を指の腹で撫でてくすぐった。
「う」
豪炎寺がこそばゆさに身を硬くする。
反応が恥ずかしかったのか、照れて豪炎寺は頬をほんのりと染め、二階堂もなんとなく手を引っ込めてしまう。どきっとした高鳴りにどろっとした悪いなにかが湧き上がった。

豪炎寺が好いてくれて気を許してくれたからこそ見せた一面。愛おしさの中に、もっと暴きたい貪欲な感情が生まれたのだ。けれども、抑えなければならない。もう生徒じゃないなどと言っても、二階堂にとって豪炎寺は大事な教え子。どんなに大人びても小さな子供なのだ。大人の欲望を押しつけたら壊れてしまう。
けれども、離そうとした二階堂の手を豪炎寺が捕まえた。射抜くほどの強い目の力は、子供騙しは効かないと示しているようだ。
「逃げないでください」
「逃げる？」
「二階堂監督は都合が悪くなると、俺を子ども扱いする」
豪炎寺は二階堂が反応を見せる前に続けた。
「俺はもっと監督の事が知りたい、近付きたい。けど、監督にそんな態度を取られたら俺はなにも出来なくなってしまう。俺、言いましたよね。二階堂監督が好きだって」
はぁ。息を吐く豪炎寺。言い過ぎました、ごめんなさいと、呟くように詫びる。
「謝るなよ。先生、少し吃驚した。豪炎寺がこんなにも自分の意見を言うなんて。お前は変わったな。雷門で出来た友達は、きっと真っ直ぐないい子たちなんだろう」
二階堂は豪炎寺に微笑む。
「俺がお前の年の頃には出来たかわからない。なんだか眩しいよ。だが、これも豪炎寺にとっては逃げになるのかな。ごめんな。豪炎寺は思う程、俺はなんでも出来るような人間じゃないんだ。俺も」
――俺も。先に続く言葉が脳裏に巡れば、緊張に胸が締めつけられた。
「俺も、今日がこのまま眠って終わるのは、物足りないと思っていた。こんな一言さえ、俺は言い出せなかったよ。わからなかった、

答えが。どう応えるのが、お前にとって理想の監督なのかって見栄も張っているのかな」
「監督。俺も、少し驚いています。監督が、俺に話してくれて」
「すまん。幻滅したか」
「いいえ……俺は、嬉しいんだと思います」
「……」
「……」
会話が止まった。テレビの音が急に耳に入るようになって、壁掛け時計の針の音まで聞こえてくるようだった。
豪炎寺の手は二階堂の手を捉えたまま、二人の視線は交差し続ける。見えないなにかが、首を動かせないでいた。目は口ほどに物を言う。言葉で気持ちを伝えれば、より瞳は想いを訴えてくる。二人の気持ちが同じだと痛いほど通わせてくる。
「その」
「あのっ」
声をかける間が見事に重なり、気恥ずかしさに顔が熱くなった。どきどきした。身体は正直に、目の前の相手が好きだと心に訴えている。この気持ちが抑えきれないと内側から叩きつけてくる。
言葉を求めて薄く開いていた唇は、決意したように閉じられた。豪炎寺が首を上げ、二階堂が背を屈めて、唇を重ねた。柔らかい肉の感触。息を吸えば人の匂いがして、ほのかにシャンプーの香りが漂う。
一度離してから、もう一度交わす。次は唇特有の水音が鳴った。三度目は引っ込めようとした豪炎寺を二階堂が追って、角度を変えて捉える。
「ん」
豪炎寺が目を硬く瞑り、瞼を奮わせた。反射で動いた手が二階堂の衣服を掴んで引っ張る。
「ん。ん、う」
口内で唾液が溜まっていくのを感じていた。二階堂の舌が悟ったかのように歯の間を割って入ってくる。ぬるりとした生暖かい感触に後頭部に寒気が走り、ごくんと喉が生唾を飲んだ。
「ふ」
二階堂が鳴らした喉の音。歯列を味わうようになぞる舌。豪炎寺は初めての感覚に震えた。衣服越しでも肌同士でもない、身体の内側で二人は触れ合っている。いやらしい事を行っているという実感を抱いていた。頭では緊張と恐怖、羞恥が駆け巡るのに、期待がくすぶっている。
「……あ、あ」
豪炎寺の口が責めに負けて開かれ、熱い息が吐かれた。しかし唾液が横から零れれば、舌から逃れて手の甲で拭う。
「はぁ……」
呼吸は濡れて、乱れている。二階堂は豪炎寺を待っていてくれるのだが、その顔は欲に呑まれた淫らなものに映った。監督ではない男の顔をしていた。豪炎寺は思う。たぶんそう見えるのは、俺も同じだからだと。
手を下ろすなり、二階堂は豪炎寺をきつく抱きしめ、重心をかけてソファへ倒してきた。豪炎寺も抱き返そうとしたが、タンクトップに侵入した手に一瞬、身を竦ませてもがいた。
「二階堂、監督」
二階堂の胸を押すが、力が入らない。拒否か、それとも誘いか。二階堂にも、豪炎寺自身にもわからないような手つきになる。
「あの……」
「うん？」

「いけません」
「うん」
タンクトップが捲し上げられ、外気が素肌に流れ込んで、胸と腹が涼しくなる。上半身など部室で着替える時にしょっちゅう見られるもので気にも留めないはずだった。なのに、二階堂の視線に性的なものを感じ、豪炎寺は羞恥を覚えて血潮を沸かせた。
「じろじろ見ても、なにもありませんよ」
首の辺りでくしゃくしゃになったタンクトップを手にかけて、露になっている胸の突起を腕で隠した。二階堂の腕は豪炎寺の両脇に置かれて、上から圧し掛かるように見下ろされている。狭い空間はまるで二人きりの遮断された世界だと錯覚しそうだ。
「なにも、ない事はないんじゃないか。いっぱい、隠してるだろ」
優しく目を細める二階堂だが、いつもとは雰囲気が違う。今の二階堂は監督という仮面を外している。一人の人間として接してくれているようで嬉しいのだが、豪炎寺は自分がただの子供だという劣等感が拭いきれず、視線から逃れたくなる。
「豪炎寺」
思惑を見透かされたのか、二階堂が豪炎寺の胸に手を当ててきた。驚き、声を上げる豪炎寺。
「うわ」
「よそ見するなよ」
顔を近付けて、鼻の頭を舌先で舐めてくる二階堂。目を丸くさせて顔を見詰めてくる豪炎寺に、喉で笑った。
「豪炎寺、心臓凄いな」
二階堂の大きな手が豪炎寺の早鐘のような心音を捉える。
「お前も、緊張するのか」
「当たり前です。俺をなんだと思っているんですか」
「はは、怒るなよ」
二階堂の瞳が下を向き、首に狙いを定めて埋められた。首筋に舌を這わせ、焦らすように、味わうように、じっくりと舐められていく。
「……あ、……うぅ……」
豪炎寺は口を開くも喉の奥で発そうとする声を必死に押さえ込む。
「……は……っ……あ、……」
無意識に握り締めた拳を、二階堂の手が包み込み、なだめるように解いて指を絡めてきた。
舌の感触が離れ、安堵したのも束の間。甘く噛んできた歯の不意打ちに、堪らず声を上げた。
「ん、ああ……！」
鼻の抜けたように鳴いて、濡れた息が吐かれる。首の薄い肉を吸われれば、二階堂にしがみついて耐えた。甘い刺激に指先を痺れさせながら、布越しに二階堂の背に這わせて抱き締める。寒くもないのに、熱いくらいなのに身体が震えた。震えながら、豪炎寺も二階堂の首筋へ唇を押しつけ、撫でるように舌先で少しだけ舐めた。
顔を上げ、見据えてくる二階堂を今度は口元を綻ばせ、ぎこちなくも微笑んで見せる。触れるだけの浅い口付けをシーソーゲームのように交互に施し合いながら、緩やかに深く絡んでいく。
「……ふ……うぅ……」
「くぅ、……」
身体を動かせばソファが軋み、布擦れと息遣いの中に高い水音が混ざる。
二階堂は豪炎寺の太腿へ手を滑らせ、股を割らせた。間に身体を入り込ませて閉じられなくして、彼を愛撫で責め立てる。
「ん、んんっ」
開かれた両足ははしたなく、抵抗する腕は撫でられて静められた。

くっつく胸と胸から伝わる鼓動、触れ合うのがただただ心地良い。人の温もりは心地良いのだと、豪炎寺は思い出すように感じた。

心なしか、頭がぼんやりとしてくる。快楽だけを求める本能が理性を脱ぎだそうとしているのだ。

「はぁ……はー……はぁ……かんと、く」

呼吸をして胸を上下させ、舌の回らない声で二階堂を求める。甘えたような、自身でも初めて聞くような声で求めるのだ。

「豪炎寺」

うん、と喉を嬉しそうに喉を鳴らす。もっとよく二階堂の声が聞きたくなって、豪炎寺はソファ前のガラステーブルに置かれたリモコンへ手を伸ばす。テレビの音がいいかげん煩わしくて仕方がなかった。

指先で音量を突いて下げる。だが二階堂の手が上から重なってきて、音量を戻された。また下げようとするがボタンを誤り、別の番組に変わる。

「監督。なに、するんですか」

問う豪炎寺。

「豪炎寺はテレビ観ないのか」

「それより、監督も脱いでください」

剥ごうと豪炎寺は二階堂のTシャツを引っ張るが止められた。

「脱がなきゃ、駄目、か」

ばつが悪そうに二階堂は視線をさ迷わせる。

「俺ばかり、ずるいです」

「そうだよなぁ……」

「どうしたんですか。嫌になったんですか」

言葉を濁す二階堂の胸に手をあてる豪炎寺。鼓動は忙しない。

「違うよ、違う。豪炎寺が、音量を変えるから……その、ブレーキが、さ」

二階堂は豪炎寺に視線を合わせたまま、薄っすらと滲んだ汗で張り付いた前髪を、手の甲で拭うように上げる。豪炎寺はじっと見詰め返し、二階堂の両頬を手で挟み込んだ。

「監督。……照れてるんですか」

「え」

「そんな風に見えます」

「どうだろう」

二階堂は小首を傾げた。頬に触れていた豪炎寺の手が離れ、二階堂の衣服へ回って捲し上げていく。素肌が露になっていく間の中で、息が呑まれる。

豪炎寺は照れていると言ったが、本当のところ、この禁忌の行為を隠していたい気持ちの表われだった。布の一枚が理性の象徴のように、剥ぎ取られて別のなにかになってしまわないか恐怖を覚えるのだ。衣服を掴んでくる豪炎寺の手は好奇心そのもの。思慮深そうに見えて、彼も年相応の中学生。興味のあるものにはすぐさま飛びつく素直さがある。

愛おしいと思うのに彼と同じように素直になれる立場ではなく、どうしようもない罪悪感が付き纏い、切なくなる。

「豪炎寺、豪炎寺」

豪炎寺の身体を覆い隠すように包み込み、己の視界さえも真っ暗になるほど肩口に顔を埋め、片手を彼の下肢へと伸ばしていく。そうして布越しに、性器へ触れる。昂りは愛撫の際に感じていた。

「……」

上から摩るように刺激を送る。すぐ耳の横で豪炎寺が、はっ、はっ、と息衝いている。なにも問わず、なにも聞かず、二人は息を吸って吐くを繰り返していた。

「う、くぅ」
低く呻き、身を捩じらせて腰をもどかしそうに揺らしだす豪炎寺。
「うう。う……」
呻きは苦しそうなのに、伝わってくる震えは快楽だとわかる。
「……っは……！」
大きく息を吐けば、二階堂の触れていた手が、湿りを捉えた。二階堂が身を起こして豪炎寺を見下ろすと、彼はとろけた瞳で唇の隙間から濡れた赤い舌を覗かせ、放心していた。自分以外の、しかも愛おしい人から施される自身への愛撫は気持ちが良すぎたのだ。
「は――――っ……は――――……」
二階堂は豪炎寺の汚れてしまったハーフパンツと下着を脱がし、洗濯するからと囁いて、それらの布で体液を拭う。
「すっきりしたか？……なんてな」
「はは」
胸を上下させて、苦く笑う。呼吸が整ってくれば腹筋の動きもなだらかになり、鍛えられた筋肉の輪郭が浮き立った静寂を保つ。
「ん」
気だるそうに豪炎寺が起きるが、二階堂が声をかける前に手を下肢へ伸ばしてきた。
「監督も」
見上げてくる瞳は色を含み、指先で薄く撫でてくる。ゴムに引っ掛けようとすれば、見るなよと戒めた。
だが言うことを聞かない指は入り込んできて、布擦れに二階堂は目尻がひくつく。
「聞きたく、ないですか」
豪炎寺は首元まで上げられていたタンクトップを下ろし、ソファの背もたれと肘掛下の角を探る。

「これ、監督が来るまで聴いていました」
そう言う豪炎寺の手にはポータブルプレイヤーが握られていた。
「これ、俺の好きな曲が入ってるんです」
「そりゃそうだろう」
さらりと突っ込む二階堂に半眼になって、そうですね、と零す。
「趣味に合うかはわかりませんが」
二階堂の耳にはめ込み、胸にもたれかかる。
「下。見ませんから、監督は俺だけを見てください」
独り言のように呟き、プレイヤーの電源を入れた。空いた手で、二階堂の性器を二階堂がしてきたように摩りだす。
「豪炎寺は、こういう曲を聴くのか」
音楽で豪炎寺の声が返ってきてもわからない。目線は豪炎寺とはまったく別の方を向いている。
二階堂もまた、独り言のように囁いた。
「お前が、こんな曲を聴くなんてなぁ」
「らしく、ないですか」
「お前の趣味、少しわかった気がして、嬉しいよ」
豪炎寺の呟きは耳に届かないのに、返事のように二階堂は言う。
豪炎寺は二階堂の心音と熱を感じながら、目を閉じる。う、と頭の上の方で零れた掠れた呻きに、たったそれだけなのに、なぜだか感動で心が満たされた。

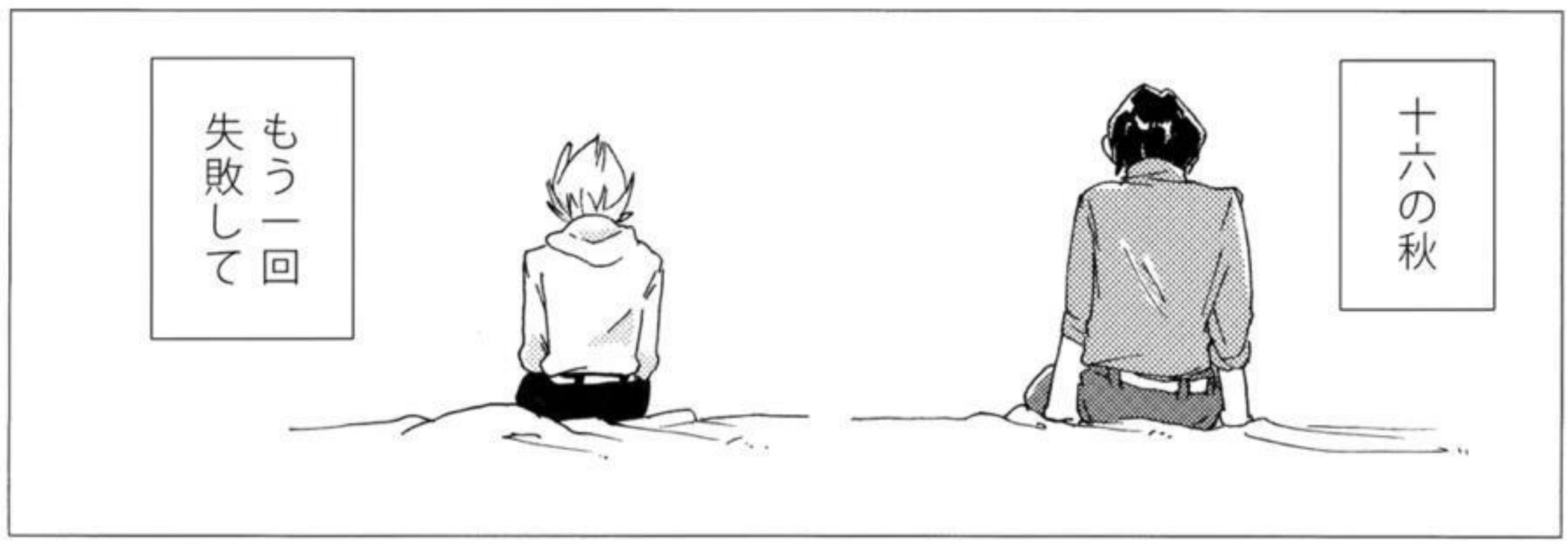
テレビを消して、体液で汚した衣服を洗濯籠へ放り込み、湯で軽く身体を流してから、二階堂と豪炎寺はソファで毛布をかけて眠る。ソファは狭く、隙間のないように硬く抱き合い、身を小さくして縮こまった。

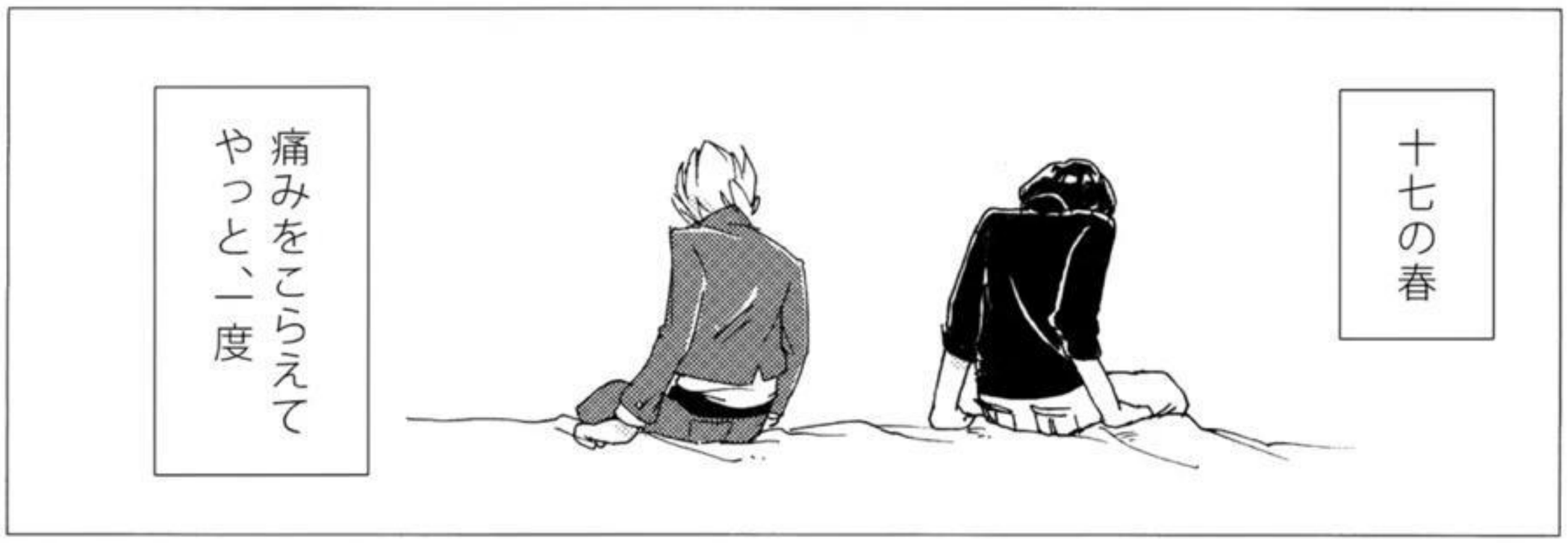
「きついな。痛くないか」
二階堂の問いかけに、豪炎寺は頭を擦りつけるように横に振るう。
「号炎寺は、ここでいいのか」
「はい。俺は監督の傍がいいんです」
「そうか。ごめんな」
「どうして謝るんですか」
「お前に窮屈な思いをさせているからさ。色々と」
密着しすぎていて互いの顔は見えない中、淡々と会話を交わす。
「謝らないでください。俺が欲しいのはなにか、二階堂監督は知っているでしょう」
「ああ。わかっているよ」
温かな手が、豪炎寺の後ろ頭を撫でた。
「わかってる……」
その先が続かない。二階堂の気持ちを感じようと豪炎寺は抱き締める力をこめる。
眠りに落ちるまで二階堂は豪炎寺を撫でていた。声に出せない抱く想いが伝わるように、何度も何度も撫でていた。頭の中では豪炎寺が聴かせてくれた音楽がぼんやりと流れている。醒めない甘い夢のように、サビだけが繰り返されていた。

END

豪炎寺

それが
十五の卒業式だった





…すいません。
お前が謝る事じゃないさ。

…
体だけ、とか

豪炎寺、
そんな風に言い切れればまだ良かったのに、

俺は、喜んでもらえるような体も持ってなかった。

…そういう事じゃないだろう
分かってます

俺、好きにして欲しかったんです

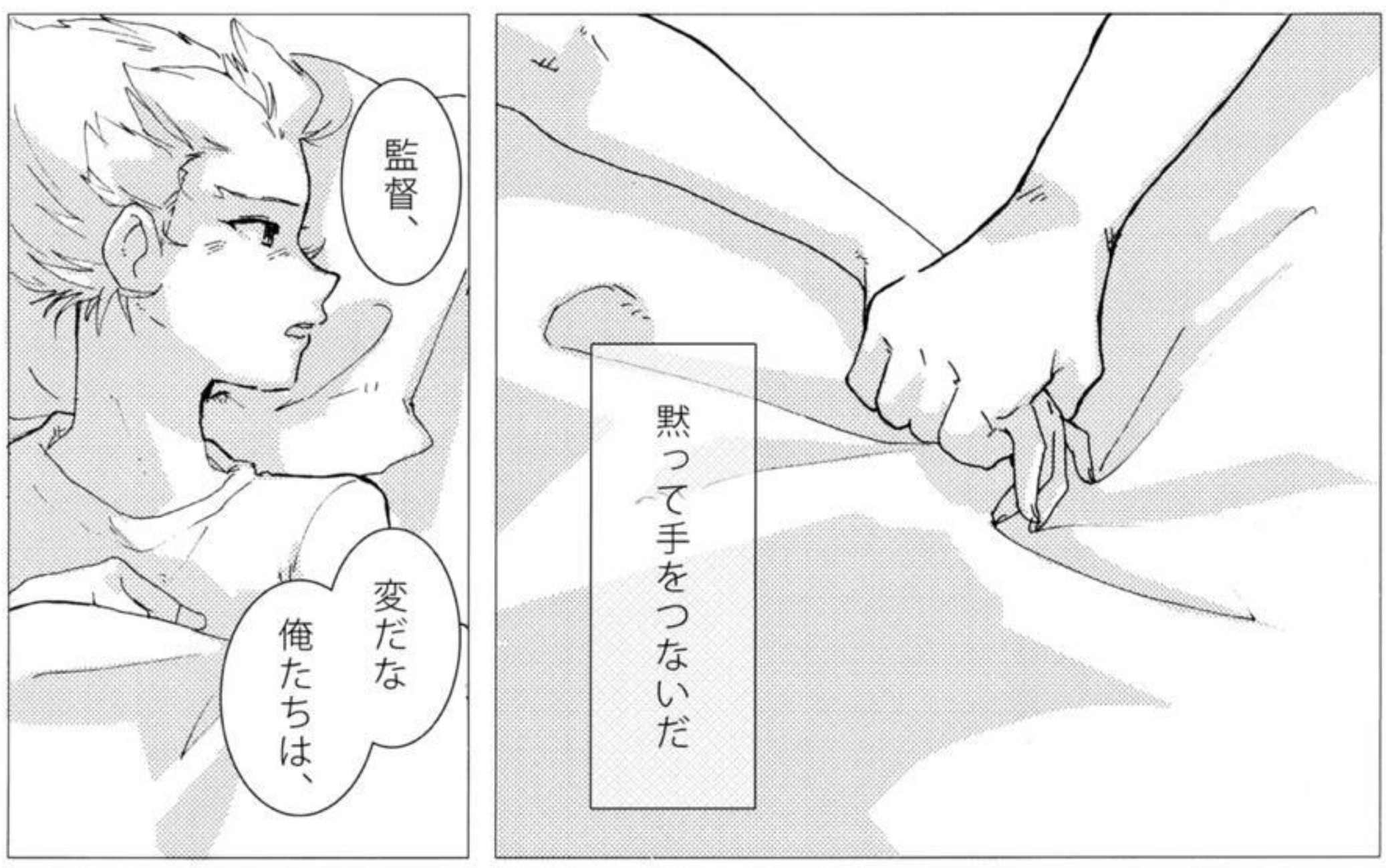
でも、好きにしてくださいって言ったら

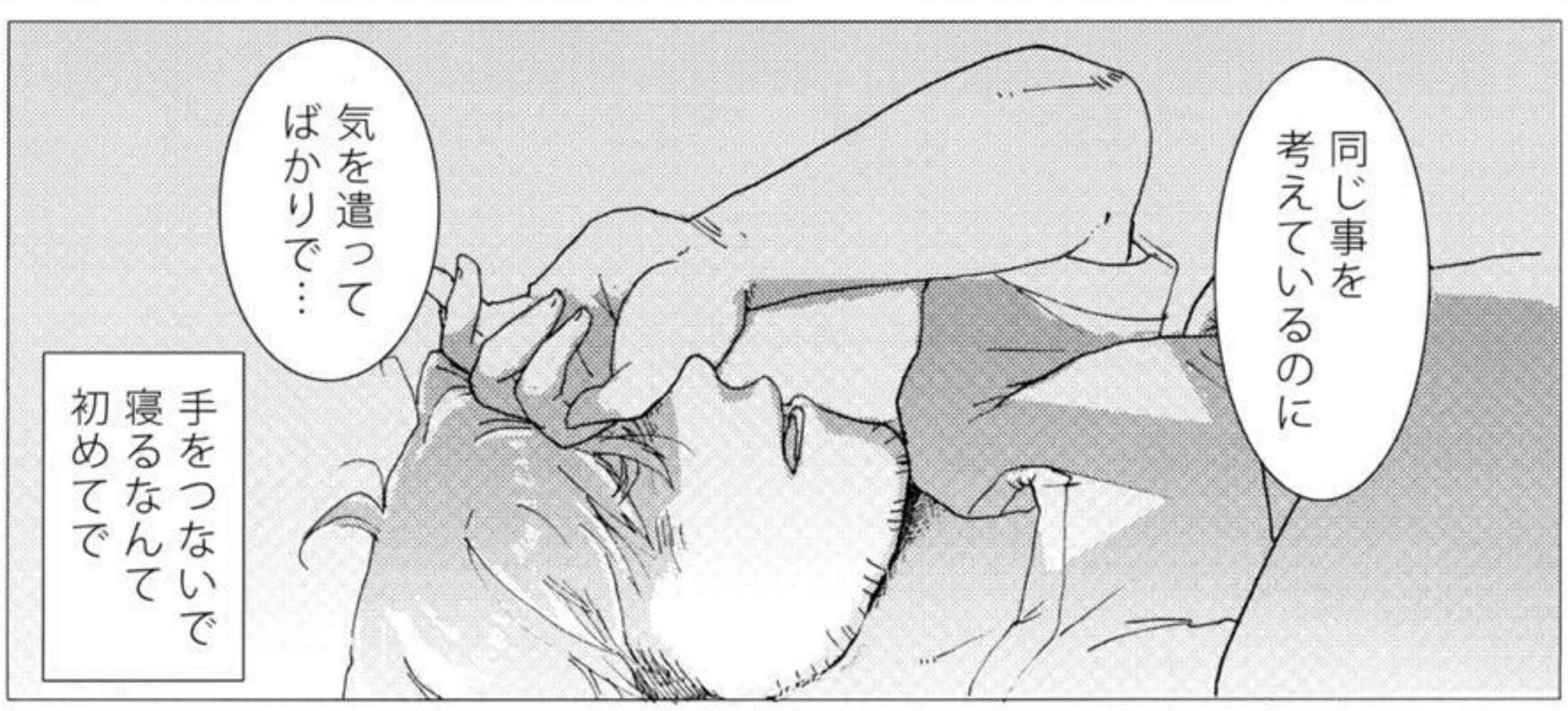
監督はやさしくするでしょう、

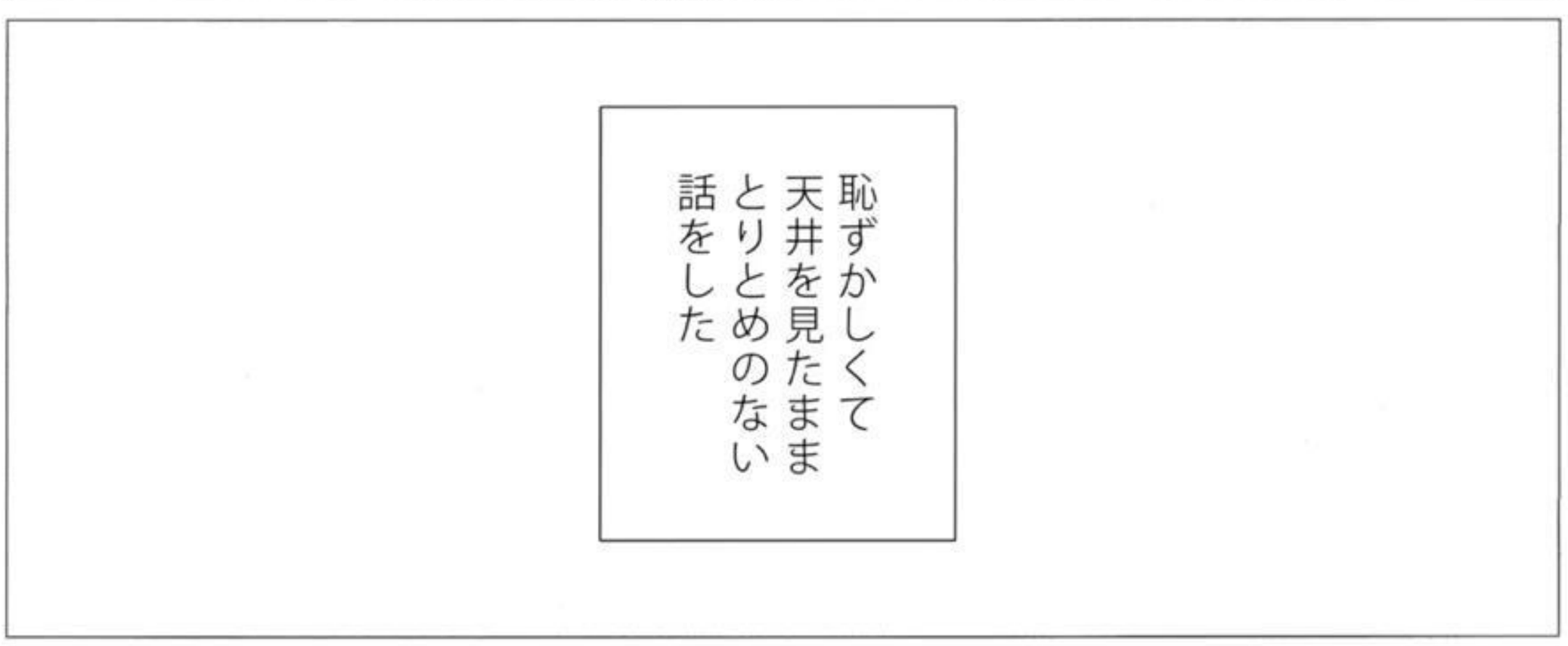
ずるい

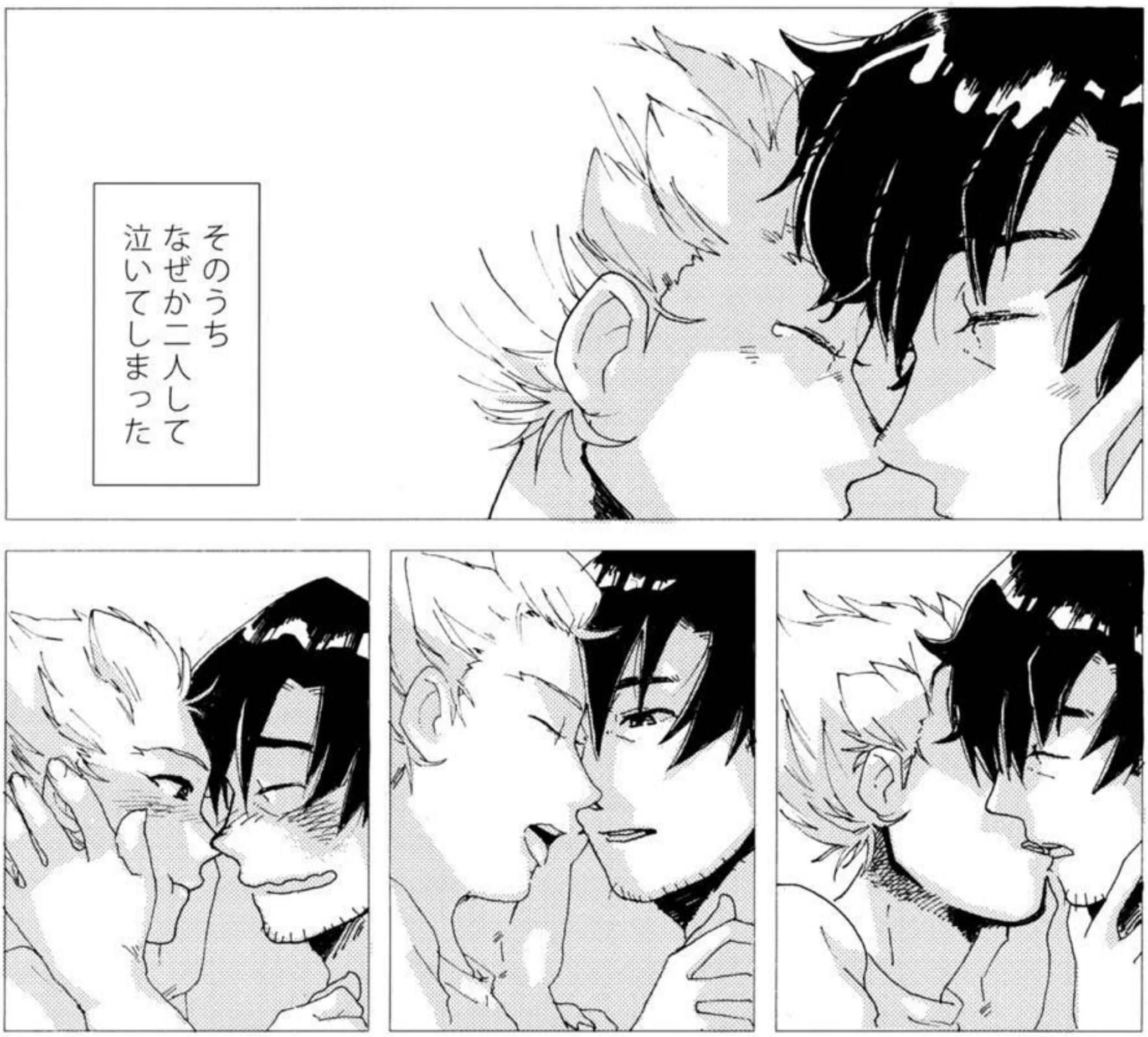
俺だってあなたにやさしくしたい

返す言葉を持っていなくて


監督、
変だな
俺たちは、
黙って手をつないだ


同じ事を
考えているのに
気を遣って
ばかりで…
手をつないで
寝るなんて
初めてで


恥ずかしくて
天井を見たまま
とりとめのない
話をした



幸せでしょうがなくて
泣いてしまっただなんて
とても言い出せなかった

二人に幸あれ!!
☆ end ☆

二十五時間

二階堂×豪炎寺　企画合同誌

05

潤

おつかれさまでしたー!!
おつかれさまでしたー
思えばその昔イナズマで初めて気になった
カップリングが二豪だったのですが
その頃の自分に全部二豪の本が出るんだよ！と
教えてあげたい気分です。やったー！
何を描こうか考えすぎておっさんが女装とか
地雷っていうか誰得なのって感じなのですが
二豪の中の刺身におけるたんぽぽとか
お弁当の中のバランポジションとして
ひっそりと生きたいと思います。
ちなみにどんなパンツはかせるか
ものすごい悩んだくせに
最終的に割とどうでもいいおパンツを
描いてしまったことが悔やまれます。
それにしてもゲームとアニメ含めて
あれしか出ていないにもかかわらず
いまだに萌えさせる二豪は恐ろしい子だなー
と思うわけでした。
ぜんぜんまとまらなかったけど
二豪がもっとふえますようにー！
そしておつかれさまでしたー！
塁10/潤。

Comment

イヌ

こんにちは、イヌです。

編集してる最中から　もう　わああ！！って
叫びだしては　深夜に盗んだバイクで走り出す
気持ちになるくらいに　しあわせでした

わたしのまんがはまた空気読んでませんが
豪炎寺さんは　3期では（今のところ）
なにも重いもの背負わず自由に楽しく
のびのびとサッカー出来るようになって
大喜びするよね…！って思ってたら
なにか違うところに着地した感じですせつない

ところで　二豪って　ほんと　いいよね…

ありがとうございました♡!!!

仁茂田あい

25h参加できて光栄です!!

二豪に出会わなかったらこいなに今
イナイレにハマってないと思います!
人生設計狂いまくっても俺は二豪
楽しいぜっ!!!!!!マジで感謝!!!!
早く他の皆さんの原稿が見たいです
私のページは星くずになる――☆
ここまで読んでいただきありがとうございました♡

二豪が好きです
すごくすごく好きです
漁船

mail : k_gyosen@yahoo.co.jp

高野タカモ

二豪っていいですよね！
今回描いていてあらためてにごうってイイナ!!と思いました。
すごく楽しかったです……うっ
本ッ当に素敵な企画ありがとうございました!!
高野タカモ、

めし

アニメ3期始めの頃のお話を描かせていただきました。
豪炎寺さんが二郎丸くんを
二階堂カントクはかわいいところも アツイところも全部
かっこいいところもあるところも
かっこいい人だとうれしいです。

ワンダフル
ネオ五時間

つづき〜
ようし！豪炎寺脱ゴラ!!!
まったく二豪はどう描いても
アダルト指定になり本当
困ったものです。

裸になって
星の中を
歩こう!!

ピュアすぎる人が
とても好きです。
☆ めしでした。

おのおです パーン!

どこをみても二豪がOPPAI おっぱい

IPPAIだなんて… 信じられない

生きててよかった〜〜 でも死んでもイイッ

こっぱずかしいものを描いてしまいましたが
赤面して汗だくで描きながらも、
「二豪にはずかしめられている」という
事実に ちょ〜気持ちイイ…
してました。届いて他の方の二豪を
拝読して足腰たたなくなるのが
楽しみです あひッ

お互いに理想をおしつけあっちゃってる
お2人が年を経るにつれて「あれ?」ってなって
ゆくZAMAを見てたいです…EROI…のん…
二豪の一生にをいとげたい…墓石になりたい…
としたらこの御本をおとなえしてください…
〜HAPPY END〜
〃ホーネー

おのおでした
ご拝読ありがとうございました

♥二豪大好きいい! See

『にごー』って言いながら首を揉むと血行が良くなるらしいぞ

絶対にガセです

二十五時間

二階堂×豪炎寺　企画合同誌

二十五時間

二階堂×豪炎寺　企画合同誌

2010.04.11 / 【代表者・イヌ】Showercap@csc.jp / 栄光印刷さま

本誌の内容を無断で転載・複製・WEBへのアップロードを禁じます。
Please don't upload my fanbook to another site, and don't resell it by the copy,the duplicate,and the net auction.

25

二十五時間

二階堂×豪炎寺　企画合同誌

おのお

漁船

see

高野タカモ

仁茂田あい

潤

めし

wagi

イヌ